

## 高等学校教育の在り方ワーキンググループ(第3回)における主な意見

- 高校入学後に不登校の状態になっている生徒を安易に通信制に転学させたり、中途退学にさせたりしてしまうのではなく、多様な学びの機会を保障することが重要ではないか。
- 義務教育段階で受けられていた支援を高等学校においても受けられるようにしていくべきではないか。
- 学校における単位認定において、授業時数の3分の2以上の出席を必要としている慣例があるが、当該要件を満たせなかった場合でも、その他の学びの方法により履修・修得が認められる場合には、形式的な出席要件にとらわれず単位を認めてもいいのではないか。
- 不登校特例校や定通併修等の制度を普及するべく、活用しやすい仕組みに変えていくべきではないか。また、ICT やオンラインを活用した効果的な支援を進めていくための体制・環境整備が必要ではないか。
- 定時制・通信制高校に限らず、全日制高校においても、小中学校での不登校や発達障害等、様々な課題を抱える生徒がいる。同年齢の生徒でも学習状況は非常に多様であり、こうした多様な生徒の状況に応じてできるかぎり柔軟に対応できるようにし、学校間連携や課程間併修を推進するために、単位制への移行を進めていくべきではないか。
- 学校間連携や課程間併修を推進することで、例えば、生徒がある高等学校に籍を置きながら、他校・他課程・他学科で開講されている単位を対面・オンラインを交えて履修することで、週に2・3日は通学し、残りはオンラインで学ぶといった生徒像も考えられるのではないか。このように、誰一人取り残さず、生徒の状況に適した教育課程を適用していくことができるような環境を整えていくことが重要ではないか。
- 全日制・定時制・通信制という課程の区分の在り方自体を見直していくことも考えられるのではないか。また、通信制を選択したり、不登校で悩んだりする生徒や保護者が存在することを踏まえれば、「学ぶこと」と「学校に行くこと」を同一視することなく、学校に行くことでしか学べないことは何なのかを議論していくことが必要ではないか。
- 全日制・定時制・通信制いずれの課程においても、生徒を自立した社会人として社会に送り出すために、生徒が自己の良さや可能性を認識し、多様な人々と協働しながら、人間関係を築くことができるよう支援することが必要であり、キャリア教育、職業意識や社会で求められる資質の育成に取り組むべきではないか。
- 学力の三要素の育成、知・徳・体のバランスの取れた成長を図り、社会の一員となる基礎・基本を高校段階で固めることが、どの課程であれ「全ての子どもたちの可能性を引き出す」ために必要ではないか。

- 中学校の教師や塾関係者、生徒・保護者に通信制など正しく知られていないところがあるが、それぞれの課程における学びの特徴を周知することが必要ではないか。
- 不登校に関して、特に通信制高校に入学した生徒の入学後の実態を把握する必要があるのではないか。
- 公立の通信制高校は、地域の生徒にきめ細かな対応が期待できる。今後少子化が進行する地域においては、高校の統廃合が進まざるを得ない場合もあると思われるところ、特に中山間地域にある全日制高校は分校的役割、あるいは通信制高校の学習センターとして、サポート体制の機能を期待できるのではないか。
- 全ての生徒の可能性を引き出し、生徒が、社会の一員となるための多様な力を身に付けた上で次のステップに移行することが可能となる教育システムは、結果として、保護者の教育に対する不安を緩和し、少子化の歯止め策ともなり得るのではないか。